

中世史と地方文書

森 克 巳

此度は講義の他に講演もせよということでしたが、堅苦しい講演はにが手の方でして、一つ肩のこらない歴史學談でもしようかという気持ちで準備して来る筈でしたが、卒業論文が一。九冊も提出されており、重労働なのでこちらへ伺う前に少しでも片付けておこうと思つて卒論のことに追ひ廻わされ、準備も不充分ですが上記の標題で少し述べさせていただきます。

平安末期の日記類をみますと「名簿^{なづきづ}を捧^{たてまつ}けて家^け礼^{らい}す」という言葉がよく出て参ります。「名簿」というのは「名籍^{なせき}」ともいふ、要するに今日の「名刺」のことです。しかしこの時代の名刺は、名前だけを書くものであつて、――大体名前には二字のものが多い。一字・二字・三字・五字のものもありますが、大体二字の名前が多いのです。私の名前も二字ですが――そこで、この時代の「名簿」――名刺のことを「二字」とも呼んでいます。名刺は名刺でも安^{やす}い名刺ではありません。

今日は初対面同志はまず名刺を交換して「どうぞよろ

しく」といふ、初対面の時は欠かれないものです。殊に若い人などは就職すると嬉しくて肩書のついた名刺をやりたりに配りたがるものです。二三年前にも地下鉄で若い青年とぶつかったことがあります。階段の所で後から降りて来て肩の所にぶつかつてもう少しで私はころがりおちるところでした。そこで地下鉄に乗りましてからさうきの青年をつかまえて「君、さうきは危なかつたじやないか」といつたら、とほけて「いや私はしません」といふ。「いや、しませんじやない。君の持つてゐる荷物でわかる」。やらないやつたと議論になり、向うが「私が名刺を出しますからあなたも名刺を下さい」というから「いやいや、君のような若い者の名刺を貰つたら僕には足しにたらず。僕は肩書をかり廻すほど大人気ないことはしたくない。君の名刺はいらぬ」ということで物別れになつてしまいました。が、そういう風に口喧嘩をしてもすぐ名刺を出せという。日本人は名刺をつかうのになれつたになつており、少し乱用気味がある。だから時には名刺を悪用されることがおこる筈です。

先程ご紹介に預りましたように、私は昭和三十三年にアメリカに参りました。これは前のアメリカ大使ライシマワー教授と私の研究が共通しているもので、私は全然知らなかつたのです。ライシマワーさんの方が私の論文に目を通しており、三十三年にマツカーサー司令官がアメリカの大学教授達から選抜した學術顧問団を日本へ招聘したことがあります。この一団が東北大学・京都大学・東京大学・九州大学へ参りましてその地区の人文科学の教授達を集めて会議をやりました。九州大学の会議の時には私も出席したのですが、一緒に来た通訳の松本警教授（今は早稲田の教授をしております）が、「この中に森教授がおられますか」といわれびっくり致しました。みたら背のひよろ長いアメリカの学者が立ちあがり「森教授の業績に深甚の敬意を払う」といわれびっくりしました。後で握手をしたら日本語がうまく、それがライシマワー教授で、当時は助教だったのですが、私とライシマワーさんが司会して九州地区の日本史の教授達の会議をやりました。そんなことでライシマワーさんと親しくなりました。

そこでライシマワーさん、プリンストン大学のリマン教授——ライシマワーさんのお弟子ですが、このリマン教授が日本と原文の關係すなわち原文の大アジア主義と日本の玄洋社の大アジア主義の關係を學位論文にするため調査にやつて来て、九丈の私の研究室を尋ね

て玄洋社關係の生残りの人を紹介してほしいということでした。そこで私が奔走して紹介してやったのですが、——そんな關係で親しくしております。それからコロンビア大学の角田教授——日本人ですが、向うで長く教授をしております。以上の三人の人から推薦をうけてアメリカ國務省の招待ということでアメリカに渡りました。今から十三年前ですが、恐らく日本史の学会で終戦後アメリカに渡つたのは最初ではないかと思ひます。國務省の方の要求は、アメリカの日本史を研究している大学を廻つて研究状況を視察して下さい。またアドバイスすることがあったらアドバイスして下さい。それからアメリカの教授達と意見を交換して下さい。ということでした。アメリカの大使館の方で「あなたは英語が出来ますか」という。「少々出来るつもりだが、私の英語では向うに通用しないでしょう」というと、「それでは通訳をつけましょう」という。それでアメリカに渡りまして通訳兼秘書として秋山高男君がつかましました。秋山君は京都大学の英文を出てアメリカに渡り、ペンシルヴァニア州のペンドルヒルにあるクエーカーの研究所で研究しており、アルバイトに通訳をやつていて、國務省に登録してあり、私の通訳にやつたのです。秋山高男というのですが、高男でなく背が小さくて子供みたいで名は体をあらわさない秋山君でしたが、私と一緒にプリンストン大学に行つてリマン教授さんに会つた後で曰く「國務省はなかなか

か行届いている。先生の通訳に先生より小さい通訳をつけるなんて、なかなか細かいところまで気がつく」と笑っていたのですが、子供のようですが通訳はうまく、どこへ行つてもアメリカ人が「あなた英語はアメリカ人そつくりだ」といわれました。そんなことで秋山君の通訳で私は一向に不自由しなかつたのです。私はたゞ初対面のアメリカ人に「ハンドウェードラ」といつて握手すれば不自由しない。殊にアメリカの日本史の教授達はみな日本語を一應り勉強しております——日本史を研究する学生は十二単位日本語を取らなければ卒業できないのですから、みな日本語ができる——ですからアメリカの日本史の教授達と会っている時には秋山君を必要としなくて日本語で堂々と話し合うことができました。日本史の学者でない他の人に会う時に秋山君の力を借りなければならぬ。こういうわけで、秋山君が通訳してくれるものですから、私はどうせ後で通訳して貰ふんだからと相手の話はよく聞いていない。そのために三ヶ月アメリカを廻ったけれど、行つた時と帰る時とで私の英語は一步も進歩していません。そういうことで英語の方は秋山君のお陰で不自由をしなかつたのですが、たゞ、西つたのは二十一のアメリカの大学を廻つて、八十何人の日本史の研究者と会つて意見の交換をしたのですが、毎日々々アメリカの学者と会う場合、私が名刺を出して貰うのは名刺をくれない。「名刺は持合せておりません」

或は「相憎く名刺を切らしてあります」ということで名刺をくれない。たまに名刺をくれるのがあるからゐると仮名——日本の仮名で名前が書いてある。おそらくこの教授は日本に留學した時に日本の慣習に従つて日本の名刺を作つて余つたのを持つて帰り、私にくれたのではないかと思われまふ。こういうようにアメリカ人は名刺をつかいません。つかうのは大体クリーニング屋とか会社の社員とかいう自分の会社の宣伝をするのに大きな名刺をもつていてくれます。そういうことで個人的な名刺は殆どつくつておりません。イギリスの方の学者は、日本の婦人用のような小さな名刺をもつて居りますが、アメリカの学者は全然持つていない。但し彼等は名刺は持つていないけれども、相手に対してのエチケットとして初対面の人の名を頭に刻み込んでしまひます。習慣になつてゐるからすぐ覚えるらしい。それに多少努力もするらしいのです。私と話をしている、今覚えてばかりの私の名を会話の由に使つて「そうですよねオプロフェッサー森」とか「さよならプロフェッサー森」とかいう風に何回も繰返します。多分これで頭に刻み込まうという訣であります。よくおぼえており忘れません。数年後何うで知つた教授が日本にやつて来たので電話をかけると思ひ出して「あつ森教授ですね、都立大学の森教授ですね」——私が行つた時は都立大学でした。そういう風にすぐ思ひ出してくれます。一旦覚えて名前は忘れ

ないで刻み込む、その代り名刺はつかわないといふのがエチケットであるらしい。

アメリカではなかなか名刺をつかわない。それと同じで、平安時代の名簿といふのもやたらに使うものではない。使うと重大な意味をもつ。すなわち自分の主とたのむ人に名刺を出す訳で、そこで「名簿を捧げる」という訳です。だから一旦名刺を差出した後、以後その人を主として主従関係が成立する。以後絶対頭があがりないといふことになりましたから、これはうっかり差出せないものです。これは貴族社会で行われていることだが、有力な所へそれより身分の低い貴族が「名簿を捧げて家来す」——従者としての礼をとるといふのが「家礼」である。「家礼」とも熟語になつてゐるし、「家礼す」という動詞にもなつてゐます。この関係はつと室町時代ぐらゐまで続いていて、室町時代の私のみた範囲では、後法興院記に（摂関家の近征政家の日記）にみられます。この日記の原文は（応仁元年五月十九日の条）

伝聞右近江中将雅國朝臣令家礼内府云々

彼仁元二条家門家礼也今就捧家如此致

心中未練之至不可説事也凡羽林輩令家礼

名家事未曾有事故太以不審也

これはどういふ事かと申しますと、右近江中将雅國が内府に家礼した。内府といふのはこの時応仁の乱以後日野

勝光で——日野家といふのは室町將軍の代々の將軍の夫人の出る家で、義満の時もここから出ているし、義政の夫人もここから出ています。この場合は義政夫人で有名な日野富子——將軍義政を尻に敷いた有名な女傑ですが、日野勝光は系図では「尊卑分脈」によると日野富子の叔父になつてゐるが実は兄であると書いてある。当時の朝廷は、バックの將軍の口ホットのようなもので將軍のいなくなりになつて居りました。ですから將軍から朝廷に頼うと頼い事は必らず通るのです。その將軍に日野富子が強い影響力をもつてゐます。日野富子を通じて將軍義政に頼み事をする、義政が朝廷に申出て希望が通る。そこで貴族達はその地位が上る。官位官職を榮達しようと思つと、日野勝光に頼み、日野勝光から日野富子を通じて將軍義政に運動する、義政が朝廷にお願いする。そのするとすぐ貴族の望む官職が与えられる。そういうわけで、日野勝光におべつかをつかい、日野勝光は非常な権力を得た。日野勝光

日野家といふのは名家です。貴族社会は、平安時代から世襲になり門閥が出来て来ます。摂家が摂政でこれが一番門閥が高い。次が清華、これは太政大臣、次は大臣家、次に羽林家、次に名家、次に諸大夫、次に侍、貴族社会の家柄はこういうふうになつてゐる。そして名家に極官があつて、摂家に生れたものは登りつめれば摂政関白にまで登ることが出来る。清華の家に生れたものは、

その極官は太政大臣、登りつめれば太政大臣までゆくことが出来る。大臣家は左大臣右大臣内大臣と大臣まで登る。羽林家というのは、近江中少将兼大納言中納言まで登りうる家柄である。名家というのは文筆をもつて朝廷に仕える学者の家柄で、并官減人大中納言まで登りうる家柄——どうも学者は昔も今も優遇されていません。日野家は名家ですから大臣までは登れない。ところが、勝元のととき日野富子との関係、義政との関係で、自分の家の極官を越えて内大臣まで登ってしまったのであり、非常な実力者であり、日野富子を背景に義政に影響を及ぼしたのである。そこで貴族達はみな日野勝光におべっかをうかう。この場合も右近江中將雅國が、羽林家であり日野家よりも門閥の高い家柄であるのに、「彼にはもと二条家の家礼だったのに今度権力家の日野勝光に家礼する。どうも此根のくさった人物である。お話にもならない。およそ羽林家がそれより下の名家に家礼するなどということとはかつてないことで不審なことである」という意味です。

室町時代頃までは「家来」は「家礼」という字を使用し、これにより主従関係が結ばれたのです。武士もまた有力な貴族に家礼する。平安末期に武士がおこってくる。源氏の源満仲は摂関家に家礼して、摂関家で屋敷を新築に造るとその家賤直具を献上したなどということが日記に出ているように、武士も貴族に、源氏は摂関家に

家礼して、その代り平忠常の乱というに東国の乱がおきると、摂関家の推挙によって討伐の將軍に任命されている。前九年、後三年の役には、義家は武士は卒いて行つて苦勞を共にして関東武士との間に主従関係が結ばれる。そのようにして貴族社会の風習などが武家社会に入つてゆくのである。武家は頼朝の時代になつて政權を握るが、頼朝の家人、いわゆる御家人との間に主従関係が結ばれる。その場合に儀式がある。但し御家人達武士は無学文盲が多いから、貴族のように自分の名前を名刺に書いて差出すことは出来なかつたから名簿を捧げるかわりに「見参」ということ、つまり將軍にお目見得することによって主従関係が成立するのです。こういったことが武家社会にずつと行なわれる。従来の「家礼」がだんだん「家来」になつてくる。江戸時代の「家礼」は「家来」になつてしまつていて、家に礼する家来は室町時代で消えてしまふ。こうして貴族社会の主従関係の儀式は、武家社会の見参に交つた。また武家社会でも、武術武芸の師匠に入内する場合には誓詞を差出したり、時には血判を押ししたりして入内の誓いをやっていますがこれがだんだん庶民の方へ行つて寺小屋などに転ると、弟子入りする場合に「束脩」——今日でいえば入学金をもつてゆき師匠に差出し自分の使う机は自分で寺小屋へ持つてゆき、束脩を入れて主従関係——師匠と弟子の關係が成立する。私の外祖父は幕末に村の寺小屋の師匠であつたが、その

入門の儀式——入門のしるしは弟子が入門しようとする場合にはホタ餅を一直箱差出すことであった。田舎ですから簡単ですが、そういうのは「ホタ餅師匠」と呼ばれたものです。

そういう風に、貴族社会でおきてものがだんだん武家社会へ、庶民階級にまで形は変わつても移つてゆく。このことは他の言葉においてもだんだん下に移つてゆく傾向があります。たとえば「公方」という言葉、これは最初は天皇朝廷をさした言葉です。ところが南北朝頃の日記『祇園執行日記』或いは『園太暦』などを読んでみますと、公方という言葉は場合によつては朝廷をさし、場合によつては將軍をさしている。この公方が將軍が朝廷かということとは前後の意味をとつて判断しないとわからぬ。ですから南北朝時代が言葉の変わり目、過渡期に当り両用に使われてゐる。これが更に室町時代に下ると、公方は室町將軍だけをさすようになつてしまふ。更に戦国時代に下つて室町將軍の權威が衰えてくると、戦国大名が自らを公方と称し、家来のものどもを地頭と呼んでゐるのです。近世になると、江戸幕府の將軍が權威を取戻して来たから、江戸時代の將軍を公方様——「犬公方」で有名で——と呼び、また將軍を公方というようになつたのです。

もう一つの例をあけると「船頭」がある。船頭というと私はすぐに漕ぎ船の船頭をいうが、古くは船頭とい

うのはそういうものではありません。平安時代の末期から船頭という言葉が日記にみえてきます。所がその船頭というのは宋の商人をいう。その「船頭」のおこりは、宋代の貿易業者、資本をもち船をもち、資本を投じて船の貨物を仕入れ、自ら船長になつて海外へ貿易に出かける。これが宋の言葉では「綱首」という。資本家で貿易業者で自らその持船の船長になつて海外へでかけるというのが綱首である。その綱首というのを日本では船頭と訳したのである。これは平安末期に宋に渡つた成尋の『参天台五台山記』という旅行記の中に、宋の綱首は日本では船頭というと書いてありますから、船頭とは宋の綱首の訳語であるということがわかります。その証拠に、平安から鎌倉期に出てくる船頭というのを調べてみるとすべて宋の商人をさして呼んでゐるのです。日本の今日の船頭をさしているわけではありません。これが今日の船頭のように変わつて来るのは、南北朝時代です。『太平記』などに、ある場合に船を漕ぐのが船頭、或る場合は資本家を船頭とし混同しております。鎌倉以前の船を漕ぐのは身分的には挨拶といつており、これが舟を漕ぐのです。今日のいわゆる船頭である。それから平安期、鎌倉期の今の船頭に当るものは「握取」といつてゐる。これは船を漕ぐ今日の漕ぎ船の船頭と似たものであり、はつきり区別してゐる。区別がなくなつたのは南北朝時代ですから、南北朝は言葉の変わり目、過渡期です。南北朝

から室町期に言葉は色々変わっています。今日の言葉のもとはこの頃にある。たとえは、「おふくろ」は室町將軍の母親で、これが下剋上で下へなり下り、今日では「おふくろ」は自分の母親を卑下してあまり上品な言葉ではなくなってしまう。それから「貴様」も戦国時代の武將の書状では、相手を尊敬した言葉ですが、時代が下り、今日では土方の喧嘩言葉になってしまった。言葉はだんだん下ってくる。

それから、「左征戸尉」「右征戸尉」「右兵征尉」など、これは大征府——左右近征府、左右兵征府、左右征戸府の大尉、小尉をいうのです。これも鎌倉時代は御恩の一つで、頼朝が朝廷に御家人を推挙して官職を与えていたたくもの、將軍の推挙によって朝廷から貰う武士の官職です。頼朝は自分の御家人の官職は一切自分の手を経て推挙することになっていた。これを破ったのが義経です。義経は兄弟ですから自分を御家人とは思っていない。そこで兄の頼朝の許しを得ないで——壇ノ浦の合戦後京都に凱旋して来ると、御白河法皇は非常な義経を寵愛して頼朝嫌いで有名ですが——後白河法皇は義経を寵愛して「大夫判官」の官職を与えます。これは武士にとつて名誉な職で「大夫」は五位——これを「タイブ」と呼ぶと意味が全然違ってしまふ。東宮大夫、皇太后大夫というふうに皇室の役人になつてしまひますが、「タユウ」と濁らないと五位になる。——大夫判官はなせ名誉職で

あるかといひますと、「判官」というのは検非違使庁の裁判官で、その相當官は大位である。だから大夫になつたら当然他の地位に移らなければならぬ。所が位が上つてももとの所に留めておく。これは今日の常識で考えれば、「あいつ位は上つたけれども、他にもつて行きどころがないので元の所におかれてゐるわい」と不名誉に兎えませんが、この当時はそうでなく「叙官」といって、その人物は判官にもつとも適した人物であつて他の地位に移すのが惜しい人物である。だから位が昇れば他に移さねばならぬ人物であるが惜しいから元の地位に留めておこう。つまり惜しまれるのであつて、「大夫判官」というと非常に名誉なのです。義経は大夫判官——素人は判官はくかん、と呼んで居り、義経最層のことを判官最層はくかんと呼んでおります——で、これは頼朝の許可を得ないで早速お受けしてしまつた。頼朝は兄弟であつても、自分は抱懐ですから、弟達はみな自分の家人であると考えていますから、家人の分際で勝手に官職を貰うとはけしからんといふことになり、これが頼朝と義経の仲が悪くなる一つの原因に后るのです。

そのように御家人の官職は、頼朝の手をへて推挙して朝廷から貰うものです。ところが、室町時代になり、だんだん時代が下つてきますと、朝廷から貰うのでなく勝手に名前をつけてしまふようになる。室町時代頃の地方の文書などに、「××征戸」とか「××左征戸」とかあ

りますが、それは大伴御封割の郷村の名であり、「メ
×左征門」などの名を勝手につけたのです。ですから、
室町時代の地方文書に「メ×左征門」というのが出てき
たら郷村の名だとみればよろしいのです。ところが、
これが江戸時代になると、だんだん成り下って、猫も杓
子もみな「メ×左征門」「メ×兵征」になってしまいま
す。

もう一つ例をあげますと、私の小學校時代の同級生の
女の子に「メ×子」というのは一人もおりません。若江
とか花江とかいい「メ×子」などつけたのは一人もあ
りません。私の時代には「子」などというのはあまりつ
けなかったのです。さかのぼってみると、皇族や貴族の
お嬢さん達が「子」をつかい、一般の民衆は「子」をつ
かっておりません。そうした習慣は私達の子供の頃まで
残っておいたのです。今では猫も杓子もみな「子」にな
ってしまっています。それから私達の小學校の頃は、同
級生の女の子は「花」なら「オハナ」、「文」には「オ
フミ」と「オ」をつけました。これは暖簾というべきか
少々軽蔑した意味で「オ」をつけて呼んだものです。と
ころがこれをさかのぼってみますと、江戸の將軍の側女
には「オ」の字がついています。「お万の方」「お茶々
の方」というように。この「オ」はやたらにつけたもの
ではありません。將軍から特に「御号を使うことを許す」
という許しが出ないとつかえなかったのです。ところが

時代が移って私達の時代になると、私達は女の子に「オ
」の字をつけるものとして、また少し軽蔑した意味で「
やいお花」などというて「オ」をつけて呼んだものです。
このように言葉というものはだんだん時代と共におし移
ってゆくものです。中世の言葉は、近世に入るとだんだ
ん変わってきます。

字の読み方も変わってきます。たとえば、「併」の字、
この字は近世では「アワセテ」とよみます。中世では「
シカシナガラ」と読んだのです。史料編纂所で私の上に
おりました和田英松先生が、或る時私に話しているには、
「近頃東大の学生が演習の時にこの「併」という字が出
てくると「しかしながら」と読む。誰がこんな間違った
ことを教えたのだらう」と辻教授が調べた結果、これは平
泉教授が学生に嘘の読み方を教えたことがわかりました。
先生が和田先生に話されたということです。私達は、平
泉先生から「シカシナガラ」と教わったのです。辻先生
の「アワセテ」の方が正しいか、平泉先生の方が正しい
か、これは一つの研究課題だと長年心にかけていましたら
出てきました。鎌倉時代の建仁頃に書かれ、写された日
南無阿弥陀仏作善集（平重衡のために焼かれた東大寺
を再建した勅遣上人の俊東坊重源が、一代の面に塔を建
てたり寺を建てたり色々善行を施した。そのリストで
す）を読んでみましたら、「併」のところに「シカシナ
ガ」と仮名がふってあります。だから「シカシナガラ」

と読んでことは確かです。その後九大に勤めておりました時に、博多の菅重屋が宇土の細川家の文書を持込んで来て賣つてくれという。終らだといつたら十二万両だという。十二万は高いものとまけろ、まけられませんが、それなら九大はいらない、もつて帰れ、どうせ持つて帰つてもまた来るだろう。九州でそんなものを賣いこむことの出来るのは九大しかありません。果して持込んで来て八万両にまけるから賣つてくれ。よし賣つてやろう。賣つたら色々なものがありました。古今要説山という室町戦国頃の辞典のようなものがでて参りました。それを賣ると、「併」に「シカシナガラ」と仮名がふつてある。そして意味は「アワセテ」「マツタク」「マベテマツタク」という意味があるとあります。「すべてまつた」と解して読むと「併」の字が出てきて前後の意味が通ずるのです。これが近世になるとこういう読み方が忘れられてしまつて「アワセテ」と読むようになり、ことを示している。

もう一つの例をあけると、「者」これは中世では「テエリ」「デエレバ」と読んだ。「といえれば」というわけですが、これを読めるか読めないかによつて、国史料の学生が学生でないかということが判断がつく試金石みたいなもので、私達にとつては入門の時に習う常識です。独学の地方史家などは「デエリ」「デエレバ」という読み方を知りません。古代中世特有の読み方です。ところが

これは近世になりますと、この読み方がわからなくなつたとみえて、新井白石の「折たく柴の記」でしたかに、この字が出てきて、これは「デエリ」「デエレバ」と読むんだと白石が読み方を書いておられますから、白石の頃になると一般の人はこの読み方を知らなくなつてしまつたといふわけですが、そういう風に中世期から今日までの間に「ん」「ん」言葉が変らなくても内容が變つています。それと同じように中世期においても時代によつて地方の文書にいろいろと変化がおこつてきます。

鎌倉期には主従関係で御恩と奉公が重要な紐帯です。きつきの主従関係を結ぶ儀式の場合、日本の場合は見参でもそれで終つてしまうのですが、ヨーロッパの騎士の国王との主従関係の儀式は、Give and Takeで、条件契約が結ばれる。国王の方から騎士を保護してやる。その代り騎士は忠節をつくすという契約です。一人の主——二君に見えずで、主と仰ぐものは一人という日本の主従関係と違つてヨーロッパの騎士道では二人の主人をもつてもよろしい。二人の主人が戦争を起したらどうするかというと、条件のよい方へついてよろしいので、日本の主従関係とは一寸違つております。こちらは主従関係の儀式の時そういう契約は結びませんが、それにしても御恩と奉公、主たるものが御恩を施してやり、これに對し恩義を感じて忠節をつくし献身的奉公をつくすということになります。この御恩の對象となるもの

は何かといつと、所領です。將軍は官職の推挙者で、將軍の推挙をへなければ朝廷から官職を貰えない。これがすなわち御恩の一つなのです。この頼朝の真似をやってのが徳川家康です。家康も諸大名が官位を貰う場合には將軍の推挙をへないと朝廷から貰えないことになってい

る。大名が直接朝廷から官位を貰うと朝廷と大名との間に關係ができ、幕府にとって恐しいから頼朝の真似をしている。これが頼朝からヒントを得たと思われるのは、家康は「吾等鏡」を熟読しているから、恐らく頼朝のやり方を真似たのでしよう。すべて大名の官職は將軍の推挙をへなくてはならない。そしてなるべくは低い位を貰ってやるというやり方、この推挙権と所領、特に所領は非常に大事でした。ですから所領は、武士にとっては一所懸命——一つの所に命をかける土地、その所領がなくては生きてゆかれないといふので一所懸命、これが今日になりますと内容が変わって一所懸命は「精を出す」といふ言葉に変わってしまいました——こういう言葉がある

くらい所領は非常に大事でありました。だから鎌倉時代には所領に関する文書が非常に多い。そして武家社会は分割拒絶ですから子供達全部に分けてやる——処分という。それから、將軍が地頭に任命する補佐——三つというものが鎌倉時代初期には沢山あります。これが中期に陥りますと、こんどは地頭がだんだん荘園を侵略しますから、荘園の年貢を抑留したり横領したり、土地の支配権を奪

ってしまったりするために、荘園をめぐるの訴訟問題の文書が多くなる。幕府がそれを仲裁した和与状などが非常に多くなつてきます。時代の一つの特徴です。

次に南北朝時代に入りますと、五十数年も戦乱が続いたのですから、戦争に關する文書が多いのが当りまゝですが、特に目立つのが軍忠狀です。義理人情もなく、道理によつて動くのではなくして私欲によつて動く。これは貴族社会でも武家社会でも南北朝時代はそうです。貴族は形勢がいいと北朝につき、南朝が形勢良くなると北朝から南朝に走る。武士も同じように南朝にのいたり北朝にのいたり、彼等の目的とするのは戦争で手柄をたてて恩賞に預ること、軍忠狀というのは自分の手柄を功績を申請して恩賞に預かれるといふ欲望から出てくる軍忠狀——これがこの時代には目立つてきます。

室町時代に入ると、室町將軍は守護大名の勢力均衡の上ののりかっている存在で、將軍自体は弱い存在でした。たゞうまく勢力均衡の上にのりかっているアクセサリーのようなものです。そしてそれが段々下剋上になつて参りますと將軍の權威が衰えて来る。だから、室町將軍から出る御教書——將軍の命令を伝える御教書も変わってくる。鎌倉時代の御教書は、幕府の執権、連署が署名をして將軍の言葉を伝えるのが御教書です。室町時代もはじめは鎌倉時代の様式をとつておりますが、だんだん將軍の權力が衰えてくると、「日下御判御教書」或いは「御

書御教書」と表つてきます。日下御判御教書というのは、年月日の下に將軍の書判をすえ、御書御教書は袖判です。そしてその文書の内容も非常に威張った内容に与つてきています。はじめは丁寧な内容であり、だんだん威張りくさつた高圧的な文章を使つています。これは要するに將軍の權威が衰えてくると、せめてもの空威張りをその御教書でやつてゐるわけです。御教書によつて權威付けようとしてゐるので、それだけ將軍の權力が衰えて來たということが文書の上にあつてゐるわけです。

室町將軍の權威が衰えてくると、土一揆が盛んにおこつて來ます。——土一揆を私は「ツチイッキ」と読んでいます。「ドイッキ」と読む学者もありますが、私の調べた範圍では「ドイッキ」と読んで証拠はあつたりません。「ツチイッキ」の方は『御湯殿上日記』の中に仮名で「ツチイッキ」と書いてあります。少くも当時「ツチイッキ」と読んでゐたことは確かです。私の考えでは、恐らく今の學者達が土民の一揆だから「ドイッキ」と読むんだと誰かがいいはじめ、それがそのまま通用したものであるかと思われまゝです。——土一揆によつて徳政を要求する徳政一揆が盛んに行なわれにために貸借關係が無効になる。そこでその対策として、貸す方が借りる方に対し、借用証文に「たとえ徳政令が下つてもその貸借關係は無効になりません」という但書を書かれています。それが九州地方に多ります。江戸時代になつても「たと

え徳政令が下つてもその貸借關係は無効になりません」という但書を証文に書いています。江戸時代には徳政令などはなかりにわけですが、信性で習慣で室町期に書いた書類の様式をそのまま意味なくうつてゐます。「仍如件」式で、そう書くのが書式書法になつてゐる。ですから九州のあつち二つちに「たとえ徳政令が下つてもその貸借關係は無効になりません」という但書を書いた借用証文が出てくるのです。こういう風に時代によつて変わつてきます。

そして戦國大名になりますと、幕府の權威は全く失墜してしまつて、戦國大名自身が一國一城の主になつて、家臣に対して土地を給与する。従つて知行状或は知行狀、これが非常に派手な山出てまいります。それから戦國大名が部下のものに自分の名前の一字を与える「一字書出し」なども又出て参ります。これも戦國大名が絶対の權力を握つて部下に恩寵を施し、自分の一字名を与えてやるといふようなところから「一字書出し」というのもこの時代から出てくるのです。

そういう風に時代によつて地方の文書がいろいろ變つて参ります。私が九州大学におりましたときに、文部省で全国の庶民史料——庶民史料が戦後紙が不足したために、また戦後正史に対する考え方が變つて、もう國が買けたのだから正史はどうでもよいという考え方になつて、貴重な庶民史料を焼いてしまつたり、屑屋に出してしま

のじり、壁の下貼りになつたりしてしまいました。私が名護屋——秀吉が朝鮮征伐の本營を置いた名護屋城に調査に参りましたら、その松尾家というのが大庄屋で、大庄屋ですから文書が沢山あって「文書が沢山ありますね」とほめたら、「いやいや三分の一くらいで、この三分の二以上は娘がお手洗に行つて落し紙に使つてしまひましてこれだけ残り巨んです」、「それは惜しいなあ」、「なんならこの残りの分だけちり紙をあつますから、残り分と交換してあつますから」と笑つたことがあります。そういう風にして終戦後あつたうちで庶民史料が皆無になつてしまつて——そこで文部省は庶民史料調査委員會を組織して、共同研究費を毎年出して、全国を八つの地区に分け、各地に科会長を置いてその地方の庶民史料を調査しました。その結果が庶民史料の目録として二冊になつて出ております。私は九州地区の科会長で、九州地区の代表になりまして九州大学の同僚庫中を皆委員に推薦して、文部省から費用を貰つては九州地区全体を歩き廻りました。ところが中世文書となりますとなかなかありません。あるものはとうにわかつていて新しく発見ということとは殆んど不可能です。九州全体を歩き廻つて中世文書をみつけたのは、三ヶ所ぐらいで、それもごく少数で、延岡の田舎の九州の一番高い滝田というその滝を御神体にして神社が出来ており、その神主のところに鎌倉時代の文書がみつかつて、これは珍らしい

と喜んだわけですよ。そういう調子でごく少ないのです。ところが、対馬に参りますと、対馬は驚くほど中世文書が沢山ある。各村々に行きますと、お館（たて）という家がある。あそこは京民が殿様ですが、京家の家臣であつて、田舎に土地を貰つた給人へ所領を貰つた庫中を給人といひますが、給人階級がその貰つた所領に住みついて農業を経営しています。給人階級ですから、勿論自分だけやるだけでなく、その下に被官或いは被官人を何人か抱えておりますが、この被官人は隸屬農です。大体被官という言葉は、これもだんだん成り下つて行つた言葉で、古代においては上級官庁の下につくところの下級官庁を被官、その役人を被官或は被官人とよんだのですが、守護大名が出来てくる南北朝頃から公私混同されて、守護が自分の下につくところの地頭を被官及び被官人と呼んで、つまり地侍が守護大名の家来になると被官、被官人と呼んだのです。ところが江戸時代になると、それが下に移つて地主に隸屬している隸屬農を被官及び被官人といひます。もとは地頭に隸屬しているのが被官で、民田の地主に隸屬している農民を名子と呼ぶというふうに區別しておりましたが、だんだん被官も名子も混同されてしまつて江戸時代に區別が無くなつてしまひます。名子も被官も東北地方では名子と呼んでいるようです。対馬に行きますと被官人、被官といひます。この被官がまだ生きてゐるのです。対馬の親方というのが給人で武士で

あつて、自分の屋敷、館、御館、これから来ているのであつてこれを「おやかた」というのです。ですから村馬へ行くと各村に一人ぐらゐる「おやかた」がある。その家は武家屋敷で、内膳元の中庭のある立派な屋敷です。そして今も被官を何人かもつて、これを小作人として農業をやつております。一例をおぼると、峯という村の松村家に行きました時に中庭で老人連中が集つて話をうかつておりました、そこで「あんたがたどうしているんだ」と聞いてみましたところ、親方が今度の土地改革で、土地を又なとりれてしまつたので親方も山へ出て働かねばならなくなつたので、親方が背負つて行く籠を私達が今日奉仕してつづつてゐるのだといひます。松村家の奥さんにおたくの被官は何人おりますかと聞くと八人いるといひます。この度で籠を作つてゐる連中は又な被官だと思ふさんが被官人達を呼びつけたら皆仕事をやめて縁側のところへ来て、縁側の下に土下座して奥さんの言葉をうやうやしく聞くといふのです。

この被官は江戸時代には内地全体におつたわけで、何しろ村馬は日本の内地より三十年文化が遅れているだらうといわれていたところですから、未だに被官が生きていて、だから土地改革をやつて親方が被官達は田を没収出して、お前達勝手に分けろといつたら、被官連中は親方を食うに困らせるようなことをしてはいけなから、ここは親方の分に残しておきましょう。親方の弟さんが

何れ戦地から歸りてくるから、親方の弟さんの分も残しておきましょうといつて遠慮しなかり分けた。そのうちにだんだん税金が高くなつて来て、持ちこたえられなくなつて、どうせ全放すなら親方のところへ返さうではないかといふことで、結局又な親方のところへ返して来た。村馬に南する限り土地改革は昔に戻りつゝあります、とむこの郷土史家が話してくれました。そういうところなんです。また戦後いかに紙屑屋でもわがわが村馬までは賣出しに出かける者はありませんから、ちやんと残つてゐる。しかも「おやかた」の所には「御判物箱」といふ箱があつて、ここに御判物すなわち知行状をお家大事にしまつてある。今もそれが大事にしまわれてある。御判物箱の中に中世の文書などみえ納めてある。はじめはこの御判物箱を見せてもらつて、そくそくと鎌倉、室町時代の文書が出てくるので私達は狂喜してよろこんだところ。が次の村に行くと、次の村の親方のところにもやつぱり御判物箱がある。見せてもらふのは非常に簡単で、内地のようにこつこつというものが文書ですといちいち説明する必要がない。御判物箱を見せていたにききたいといふと、うやうやしく持つて出てくる。あけてみると中から中世の文書がそくそくと出て来る。どの村にもどの村にもあるので、しまひには驚かなくなつてしまつた。そしてこの御判物箱には家電があつて、女子供は手を触れてはいけない。主人公だけが手を触れる。地震、火事があつた

ら何よりも御判物箱を先に持ち出せというのは、昔は御判物によつてその土地の知行の証拠になるのだから大事だつたに相違ない。今はそういうことはないのですが、家蔵ですつと続いているわけです。たゞし、やはり主人公が亡くなつて未亡人のところは駄目です。やはり女の人達はまだ関心がない。未亡人のところへ行つて御判物箱を見せていたゞきたいと持ち出して来たのをあげた途端、中から鼠が飛び出したりしてびっくりさせられたこともありましたが、そうでもないところは依然として御判物箱を大事にしている。ですから全国で恐らく戦後対馬ほど中世の文書が天山出るところはありません。そして対馬ほど大事にしているところもありません。九州を歩き廻りましたが、殆どさう言つたニミヤ所ぐらいしか中世文書は出なかつた。恐らくこちりに来ても、中世文書はもう出尽してしまつて、これから新しく発見するという事はなかなか不可能だと思ひますが対馬だけはそういう風習に従つて中世文書が天山あるというわけです。

なお、むこうで調査して歩いたことについていろいろ感想を述べたいのですが、時間がなくなつて来たようです。が、いづうも雑然とした屢談になつてしまつて何のお役にも立たなかつたかと思ひますが、これで私の責をふさがせていたゞきたいと思ひます。

(文責 編集部)

★受贈交換圖書(1) 43・10・5—11・26

秋田史学	10号	秋田大学史学会
うそり	5	下北史談会
史海	15	東京学芸大学史学会
陸奥史談	39	陸奥史談会
富士論叢	1351	富士短大学術研究会
正史	36	東北史学会
人文研究	1918	大阪市立大学文学部
研究報告	267122	蘭学資料研究会
社会科学	20123	同志社大人文科学研究所
正史教育	16卷10号	正史教育研究会
青森市史	8 資料編2	青森市役所
史泉	31号	関西大学文学部史学会
MUSEUM	9・10	東京国立博物館
新しい道史	29号	北海道道史編集所
横浜市立大学論叢	19巻3号	横浜市大学術研究会
うとつ	71	青森郷土会
駿台史学		駿台史学会
熊本史学	34号	熊本史学会
青森銀行史		
東海史学	1巻4号	東海史学会
萬葉	69号	萬葉学会